



加賀美雅弘著
講談社現代新書

「気象で読む身体」

講談社, 1991年
208頁, 600円

世はまさに健康ブームである。書店や食料品店の棚には、健康云々と称する書籍や食物が所狭しと並び、サラリーマンやOLは帰宅途中にスポーツセンターに立ち寄り、水泳やエアロビクスに興じる。休日には家族そろってテニスや森林浴など……。こうしたなかで、天気と健康との関係に多くの人々の目が注がれ、数多くの書籍が出版されている。そのなかで、本書はこの「天気と健康との関係」すなわち「気象と身体との関係」を、身近で具体的な例を用いて、わかりやすく紹介しているが、そればかりではなく、その学問的背景や研究方法にまで言及し、「気象と身体との関係」に対する新しい見方の一つを提示しているところにその特色がある。

本書の第Ⅰ章は、フェーン現象と死亡記事というショッキングな内容から始まる。つぎに、フェーン現象の本家本元であるドイツでの「フェーン（現象）と人々の身体との関係」に関する研究が紹介され、この研究をベースに実施されている医学気象予報の紹介へと話題が展開する。ここでは著者のドイツ、ハイデルベルグ大学留学の経験が生かされており、臨場感あふれる資料と話題に読者は興味を引きつけられる。そして日本の医学気象予報の現状へと話題は移り、喘息の発作の予報、光化学スモッグ予報、花粉情報が紹介されている。

第Ⅱ章では、「気象と身体との関係」を過去の人々はその様にとらえ、学問的にどのように発展させてきたのかという歴史的なことが述べられている。そして現在、この問題の学問的基盤となっている「(人体) 生気象学」が紹介されている。

第Ⅲ章は「気象と身体との関係」の時間変化ともいべき季節の話となる。季節病の定義が述べられ、季節病

カレンダーの話、そして季節病歳時記と話題が展開する。季節病カレンダーの部分では、日本ばかりでなくヨーロッパ各国の季節病カレンダーが提示され、気候の違いによる季節病パターンの違いをはっきりと認識することができる。また、季節病歳時記は、「春と5月病」、「夏の鰻」、「秋の食中毒」そして「冬のインフルエンザと脳卒中」というように身近な話題でまとめられている。

さて、前章が「気象と身体との関係」の時間変化を取り扱ったのに対して、第Ⅳ章では「気象と身体との関係」の空間的な分布を扱っている。日本における胃ガン・脳卒中の分布に始まり、マラリアなど地域特有の病気である風土病へと話がつづく。そして、いかなる気候をもった地域が身体に対して快適であるか、あるいは不快であるかということ、旧西ドイツを例にあげて説明している。これに関連して、ドイツにおける保養地の話題が紹介される。さらに、森林浴の話へと展開し、森林浴の効用を考える上で、著者が現在注目している中国医学思想が紹介されている。

第Ⅴ章では、「気象と身体との関係」は、西洋科学と東洋科学の融合による新しい見方によってはじめて明らかにされるのではないかとし、現在、著者がこの問題に対してどの様に考え、どの様にアプローチしようとしているかが示されている。

本書は内容あるいは構成に多少、難点があるが、若い研究者仲間が「気象と身体との関係」を明らかにする生気象学という学問をどの様にとらえているかということを知るうえで、じつに興味深い本であると思う。また本書は「身体（健康）」という身近な問題をやさしく取り扱っているので、どこでも気軽に読むことができ、本書の内容を種に家族の者や友人と対話を楽しむこともできるのではないだろうか。さらに、「気象と身体との関係（生気象）」をより深く学ぼうという者には本文中あるいは巻末の参考文献がとても役に立つであろう。

(防衛大学校地球科学科・鳥谷 均)